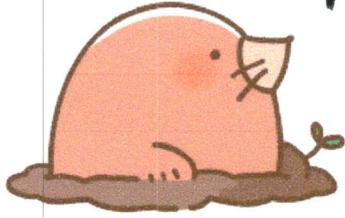


徳成寺

寺じかから版

第195号 2023年3月



いつもありがとうございます。住職の大山です。

現在、断捨離中です。いつかきっと使うに違いないと思って

保管したまま何年も経過した物がなんと多い事が驚き呆れています。

あんな事やこんな事に興味を持った時期もあったなあとしみじみ

しながら、心でお礼を言ってお別れし捨てています。過去の自分に

別れを告げて、新しい自分に生まれ変わるようなと言ったら大げさですが、

そんなさすがさがあります。「いつだったか きみたちが空を飛んで行くのを

見たよ 風に吹かれて ただ一つのものを持って旅する姿が うれしくてならなかったよ

人間だって どうしても必要なものはただ一つ 私も 余分なものを捨てれば

空をとべるような気がしたよ」(1980年発表 星野富弘さんの詩「たんぼぼ」)

あれもこれもではなく、唯この事一つのシンプルな生き様へと背中押されています。

発行責任者
住職
大山健児
坊守
大山ひびみ



大山超世の耳を澄ませば

お世話になっております。副住職です。

先月は妻の祖父の3回忌で山口県に行きました。山口県のお家は現在空き家となっており、我々が訪れた際にも遺品整理が着々と進行している状況でした。整理の最中に妻のお父さんが「悲しいよなあ。死んじゃったら残ったものって全部ゴミにしかならないんだよね」と漏らしていました。その時、作家の三浦綾子さんの言葉が頭をよぎりました。「一生を終えてのちに残るのは、われわれが集めたものではない。われわれが与えたものである」という言葉です。

今回の法事で妻や家族からおじいさんの思い出話を沢山聞く事ができました。集めてきた物は時間経過と共に陳腐になっていくのは避けようがない事です。しかし、手に入れる過程には必ず物語や思い出が残ります。残ったそれらが与えられたものであり、私たちの生き様に深く関わっていくんだと感じました。写真はおじいさんの自宅からの景色です。ベランダから瀬戸内海を一望できる抜群のロケーションで、妻が高松にお嫁に来てくれたのはこの海を見て育ったからなんだろうなあと感じました。

